

## 山の発見

山登りは、登るべき山を発見した時から始まる。

8月8日、北海道はニセコ連峰のほぼ中央に位置する、目国内（めくくない）岳に登ってきた。目国内岳と聞いて、「ああ、あの山ね」とパッとプロフィールが浮かぶ人は、なかなかの「北海道の山」通である。北海道在住の山好きならいざ知らず、本州・四国・九州の人間では、山好きを自認していても、目国内岳は名前も聞いたことがないという人が多いのではあるまいか。

お勧めの登山入門書に、横山厚夫さんがお書きになった『登山読本』（山と溪谷社刊、現在は品切れ）がある。最初の章は「山の発見」で、その中の「山を知る」という項に、「山登りの第一歩は、山を知ることから始まります」とある。

だいぶ以前、羊蹄山に登った時のこと。その行きがけだったか、帰りがけだったかの駄賃にニセコアンヌプリに登ってきた。横山さんの著書に『一日の山・中央線私の山旅』がある。アルピニズムからツーリズムに転向した頃、この本を片手にして中央沿線の小さな山に日帰りハイキングを楽しんだものだ。山は日帰りでもアプローチが不便だと、下って一泊するとか前泊しておく必要のある山もあったりする。

下って一泊、翌日帰るだけではもったいないのでそれほど時間を要さない山を一つ登る、それが「帰りがけの駄賃の山」。

前泊して目指す山に向かう時、一日目に小さな山を一つ登っておく、それが「行きがけの駄賃の山」。横山さんのネーミングである。

他人のお尻について登っているだけでは、山の発見はない。例え行きがけの駄賃の山であっても、登ると決まったからには事前チェックをする。事前チェックの第一歩は地図を広げて見ることだ。ニセコアンヌプリ周辺の地図を広げて見ると、主峰であるニセコアンヌプリから西へ、ニセコ連山が連なっていることは一目瞭然だ。イワオヌプリ、チセヌプリ、目国内岳、雷電山、図上に次々に山を発見できる。

かくて目国内岳を発見し、二年前にニセコアンヌプリ～目国内岳～雷電山というニセコ連峰縦走の計画が出来上がり、実施した。雨、ずぶ濡れになった。それでも目国内岳は充実感を与えてくれた。再訪を虎視眈々と狙っていたのだが、チャンス到来、二度目の頂きに立つことができた。

若い人の間で、富士登山が大ブレイクしている。富士山に登り、高尾山に登り、次なる山は金時山なのだそう。金時山の隣の山に登ってみようかという発想がない。きっと、他人のお尻にくっついて登っているだけで、地図を出してないんであろう。地図を広げないと、新しい山の発見がない。地図を広げてみなさいよ、金時山の東隣に明神ヶ岳、南東に丸岳、北北東に矢倉岳を発見できる。登るべき山は、無限に広がっていく。山の発見、ワクワクする作業ではあるまいか。